

「環バルト海」地域での協力を考えてみると、地域協力や「環バルト海」地域としてのアイデンティティの形成が一定の成果をあげていると考えれば、それは、必ずしも内的要因ではなく、外的要因が大きいことを指摘したい。協力を推進するものとしてラマシェヴァ氏が強調していたハンザ同盟も、加盟都市が必ずしも共有の意識をもっていただけではなかった。また、戦争や対立の記憶の希釈や歴史的な交流こそがアイデンティティ形成の基盤であるという指摘によって、「環バルト海」地域で進められている国家や自治体がイニシアティブをとった協力のための努力に向けたものとして評価している点は、必ずしも首肯でき

ない。

確かに、冷戦の終結が「環バルト海」地域の協力を促進したが、それは、地域の実態から要請された必然性によって進展しているのではないだろうか。共通の歴史的経験が、アイデンティティ形成の重要な要因となるというよりも、地政学的条件を背景とした地域の発展のための現実の必要性が、交流や対立の歴史にも見られたと考えられる。

最後に、環日本海地域では、ナショナリズムが協力の阻害要因として指摘され、個人的な経験を通じて共通アイデンティティを形成する可能性に触れているが、「環バルト海」地域と比較するだけの説得力には欠けているように思われる。

環オホーツク海地域協力の研究

黒瀧 秀久・田中 俊次（東京農業大学）

今日、経済のグローバル化が進行していく中で、従来のメインシステム・サブシステムの貿易循環構造では、経済循環の安定的な発展は見込めなくなりつつあるといえる。そこで、これまでの貿易循環を維持しつつも、それとは別に地域貿易循環の形成が求められていくわけだが、これについては国際交流のための地域圏形成へ向けた活動が急務であり、かつそれが今後展開されていくこととなるといえる。なかでも北東アジアにおける広域圏交流は、①環黄海圏交流、②環渤海圏交流、③環日本海圏交流、④環オホーツク海圏交流圏域にまで拡大し、加えてこれは、辺境地域として最後に狙上へのぼるであろう。そこで辺境地域への交流展開を想定したうえで環オホーツク海圏交流を位置づけ、環オホーツク海圏交流の課題について考察し、確たる発展方向を模索する必要があると

いえる。これは日本にとって、かつての北海道が辺境として担ってきた位置づけの延長上にも位置するものといえるが、加えて環境問題の視座を含めた展開方向を考察する必要がある。また、環オホーツク海圏における経済地域的位置づけであるが、オホーツク海に隣接する地域〔千島列島、カムチャッカ州、マガダン州、パバロフスク地方、サハリン州、沿海地方、黒龍江省、吉林省、モンゴル、北海道〕がそれに相当すると考えられる。

続いて、この度視察調査を実施したロシア・サハリン州と中国東北三省について述べたいと思う。今日、サハリンはサハリンプロジェクトによって多国籍企業の参入により事業が拡大しており、北東アジア地域の石油・液化天然ガス基地へと転化していきつつある。加えて、化石燃料資源による環境問題解決の問題が今後の課題となって

いるものといえる。これに加え、漁業資源や森林資源の枯渇、農業衰退の問題など資源の持続的利用と環境保全が重要であると言える。中国東北三省については、都市部と農村部の経済格差をはじめ、様々な問題があり特に環境問題は深刻であるといえる。今後、環境問題を改善するためには、経済開発同様、今後の北東アジア地域協力における経済面の日本の資金の協力が期待されている現状がある。中でも黒龍江省は北海道と提携しており、三高平原の農業開発、特に稲作技術開発での協力が進んでいる。今後は日本への資源供給力が問われるエリアである。また、黒龍江省は退耕還林政策が行われて過度の農地開発への反省が進行している。主な環境問題点としては排ガス・排煙問題と水質汚染があげられ、特に水質汚染については汚染物質が松花江から黒龍江、アムール川へと流れ、オホーツク海を汚染する可能性がある。

21世紀を迎えた今日、オホーツク海圏地域は、グローバリズムの過程で資源供給基地としての優位性を喪失しつつあり、他方では冷戦解体後のデ

タントを巡って、新たな国内的要因と国際的要因による政治経済的枠組みと社会的システムの枠組みが国際交流を含めたかたちで実現される必要性が出てきた。そのような中で、「環オホーツク海圏交流」は資源を日本が開発輸入するという古いかたちの経済交流を中心としたものでなく、相互交流を目指した、さらには、21世紀の地球的規模での経済展開を示す持続的可能な環境問題を踏まえた相互協力的課題が中心でなければならない。

こうした状況を受けて、環オホーツク海圏におけるランドデザインにおいて重要となってくるのは多層的ガバナンスの形成であり、「越境広域経営」の概念が環オホーツク海圏の理論的位置付けのキーポイントになるといえる。また、今後は資源管理を環境資源管理へと組み替え、NorVisionやNiraVision、NeaVison（North - East - Asia Vision）などを踏まえた上で、環オホーツク海圏地域独自のランドデザインを構想していくことが今後の課題である。